

# 恋愛関係崩壊後の関係における関係性認知の次元が及ぼす 影響についての検討

山 口 司

## 恋愛関係崩壊後の関係における関係性認知の次元が及ぼす 影響についての検討

### A Study of Relationship Perception Dimension in Post - Dating Relationship

山 口 司

#### 目的

近年、失恋に関する研究が増えている。本研究では失恋から生じる新たな関係として、Post-Dissolution Relationshipについて検討する。Post-Dissolution Relationshipとは、「恋愛関係終結後に同一パートナー同士で継続された対人関係、特に結婚前の元恋人同士による友人関係」(増田, 2001)と定義される(以下、関係性をPDR、PDR当事者をPDRパートナーと表記する)。しかし、PDRについての研究は少なく、その知見は蓄積されているとは言い難い。本邦において初めてPDRについての報告をした増田(2001)は、PDRについて、PDRを成立・維持する動機の説明の不十分さを指摘している。山口(2011)は、PDRについて主に行動的な側面から、恋人関係や異性友人関係との比較を行い、PDRが恋人関係や異性友人関係とは異なる性質を持つ可能性があるということを示唆している。しかし、山口(2011)では、PDRとの関わりの有無のみしか尋ねておらず、実際にPDRとどのような関わりがあるか依然未確認のままである。

ところで、PDRを検討する際には、いくつかのタイプを念頭に入れて考えた方が、理解をしやすと思われる。なぜならば、一言にPDRと言って、関係崩壊後も良き友人とし

て関わっている場合、いやいや関わっている場合などさまざまな形態が考えられる。そこで、本研究では、PDRパートナーとの関係の在り方を人が認知する際の判断枠組みの構造を明らかにするために、PDRという関係自体をどう捉えているかに焦点を当て、その捉え方によって、PDRパートナーとの関わりが異なるのかについて検討する。PDRパートナーとの関係をどのように捉えているかについては、関係性認知を用いて検討する。また、PDRパートナーとの関わりとしては、コミットメント、交際中に生じる感情、動機づけを取り上げる。以下、それぞれの変数についての検討理由を簡潔に記す。また、その際、PDRと併せて、異性友人関係についても検討する。青年期にとって、友人関係は重要な関係である。「友人関係といえば、同性友人関係をさすことが多い」(和田, 1993)と述べているように、本邦においては、同性友人関係研究は多くみられるが異性友人関係についての研究はまだまだ少ない。宮木(2007)の報告によると、青年の多くは異性友人がおり、多くの青年が異性友人の必要を述べている。しかし、PDR同様に、異性友人についての研究は少なく、PDRと併せて、異性友人関係をどのように捉えているか、異性友人関係の認知構造についても検討する。したがっ

て、本研究の目的は、PDR や異性友人関係の認知構造を明らかにすることを第一の目的とし、第二の目的として、PDR における、認知構造によって、PDR を分類し、認知構造の違いによって、PDR パートナーへの接し方が異なるかについて検討する。

## 関係性認知

関係をどのように認知しているか知ることは、その関係の構造を理解する上で重要であるし、その関係にどう接するかに影響を及ぼすと思われる。清水・大坊 (2005) は、関係性認知を「人が関係性を認識してもつ認知的表象」と定義し、関係性認知を関係の現在の状態や将来の予測などを含めた関係の知識の総体であるとし、人が、社会的に適応するためには、他者との関係が上手くいっているかどうか、これからも続くかどうかについて知る必要があり、特に、親密な他者との関係は、個人によって社会的基盤となるので、関係性をどのように認知するかについて明らかにするのは重要であるとしている。

関係認知の先行研究に、Deutch (1982) と林ら (1984, 1985) がある。Deutch (1982) は、一般的な 2 者関係の関係認知の次元を、2 人が助け合う関係か、あるいは競い合う関係かの『協調-競争』の次元、2 人の地位や権力関係が同じ関係であるか、異なる関係であるかの『対等-非対等』の次元、課題達成を目的としている関係か、親密さを発展させることを目的としている関係かの『課題指向-社会情緒』の次元、公な社会集団における関係か、プライベートな関係かの『公的-私的』の次元、2 人の関係が親密で深い関係であるか、挨拶を交わすだけの浅い関係であるかの『緊張-表面的』の次元の 5 つの次元を想定している。一方、林ら (1984) は、社会の中で想定しうる様々な 2 者関係認知次元として、『緊密-表面』、『気楽-緊張』、『上下

-対等』、『協調-競合』、『公的・課題志向-私的情緒』という 5 次元を確認している。また、林ら (1985) では、Significant others に限定した 2 者関係認知として、『緊密-表面』、『上下-対等』、『協調-競合』、『公的・課題志向-私的情緒』の 4 次元を確認している。近年では、先述した清水・大坊 (2005) が重要な関係として恋愛関係の関係性認知について、関係アイデンティティや特別感といった関係の重要性を示す『重要性』の次元、緊張感を示す『緊張感』の次元、関係の安定性や不確実性を示す『不確実性』の次元、関係の明朗さや活動性を示す『活発性』の次元という 4 次元を確認している。また、渡邊 (2006) では、同性友人関係の認知について、林ら (1985) の『緊密-表面』、『気楽-緊張』、『上下-対等』、『協調-競合』の 4 次元を内包したものに当たる『親密な関係』の次元、『公的・課題志向-私的情緒』に相当する『感情的関係』という認知次元を確認している。このように関係性によって、関係への認知が異なるといえる。今まで、恋愛関係や同性友人関係を含む、多様な二者関係についての関係性認知は検討されているが、PDR についての関係認知については検討されていない。PDR はいかなる関係性認知を有しているのかについて探索的に検討する。また、PDR 同様に異性友人関係の認知も検討されていない。そこで、本研究では、PDR と異性友人関係の関係性認知の次元を明らかにすることを第一の目的として、第二の目的として PDR に焦点を当てて、PDR の関係認知の違いによって、コミットメント、交際中に生じる感情、動機づけが異なるのかどうかについて検討する。

## コミットメント

他者との関わり合いを示す指標として、コミットメントがある。対人関係を包括的に理解する社会的交換理論の概念によると、コミッ

トメントとは、「対人関係の持続性にかかわる概念であって、所与の関係を継続したり、あるいはその関係から離脱しようとする意志とその関係にどれだけ深く関与しているかに関する認知」(中村, 2003)である。しかし、従来、社会的交換の概念で用いられてきたコミットメントの指標は、関係満足感、代替関係の質、投資サイズといった変数の加算的な変数として概念化され、特に、Rusbult (1983)の投資モデルによると、関係への満足感が増し、代替関係の質が低下し、投資の重要性が増す場合に、コミットメントが増加し、コミットメントが増すほど、関係が継続すると考えられた。しかし、コミットメントの測定方法や、コミットメントの一貫した定義への同意には達していない (Frank & Brandstätter, 2002)。多くのコミットメントを取り上げている研究は、コミットメントの測定において、「相手との関係が、どの程度持続してほしいと思うか」、「相手との関係に、どの程度深く関わっているか」というように、直接的に継続の意思を尋ねており、コミットメント自体の質について検討はされていない。Johnson (1991)は、コミットメントに対して、コミットメントの定義において区別される必要がある、“want to”、“ought to”、“have to”の3つのコミットメントのタイプがあると主張している。Johnsonは、“want to”に対応した、関係を続けたいという感覚の“Personal Commitment”、“ought to”に対応した、関係を続けるべきであるという感覚の“Moral Commitment”、“have to”に対応した、関係を続けなければならないという感覚の“Structural Commitment”の3つのコミットメントタイプについて言及している。一方で、Frank & Brandstätter (2002)は、Johnson (1991)の区別にも理論的な根拠が乏しいことを指摘し、それらの区別を接近-回避という視点で統合し、相手との関わりを続けること自体に強い魅力を感じ関係を続けたいと願う接近的コミット

メントと相手との関わりをやめることで失われてしまう損失を避けるため関係を続けねばならないと考える回避的コミットメントという2つのコミットメントからなる接近的コミットメント-回避的コミットメント尺度を作成し、カップルを対象として縦断的調査を行い、接近的コミットメントに基づいて関係を継続しているものほど、関係満足感が高く、回避的コミットメントに基づいて関係を継続しているものほど、関係満足感が低いことを明らかにした。このように、コミットメントという関係継続の意思には関係に積極的に関わろうとする場合や関係を失うことによって生じる損失を回避するために関わろうとする場合があり、それに伴い関係への接し方も異なると思われる。本研究では、この接近的コミットメント-回避的コミットメント尺度を用いて、PDRへのコミットメントについて検討する。

### 交際中に生じる感情

次に、PDRとの関わりにおいて、どのような感情が生起しているか知ること、PDRという関係の理解において重要であろう。立脇 (2007)は、今まで、肯定的感情や否定的感情の一方を測定する尺度はあったが、両方を包括的に測定する尺度がないことを指摘し、その両方を測定できる異性交際中に生じる感情尺度を作成している。そして、恋人、片思い、異性友人といった異性との交際中の感情について検討した結果、異性交際中の感情として、『情熱感情』、『親和不満感情』、『尊敬・信頼感情』、『攻撃・拒否感情』の4側面があることを明らかにし、異性友人との交際では、いずれの感情もあまり感じていないが、尊敬・信頼感情を有しているほど関係評価が高く、親和不満感情を有しているほど関係満足感が低く、また、片思いの人との交際では、情熱感情とともに、関係評価を低める親和不満感情も多く感じていた。そして、恋人との交際

では、関係評価を高める情熱感情や尊敬・信頼感情だけではなく、関係評価を低める攻撃・拒否感情も多く感じていた。このように交際中に生起する感情が関係の形態によって異なり、感情が関係自体の評価や、満足感と関連がある事がわかる。そこで、立脇では検討されなかった異性関係としてPDRを取り上げ、PDRパートナーとの関わりでどのような感情を生起しているのかについて検討する。

### 動機づけ

また、関係性をどう認知しているか、その関係でどんな感情が生起するかという認知や感情とともに、どうして、その関係に関与しているのかという理由つまり動機づけが重要であると考えられよう。先述した通り、増田(2001)は、PDRについて、PDRを成立・維持する動機の説明の不十分さを指摘している。山口・今川(2008)では、接触頻度、友人ネットワーク、失恋コーピングの視点からPDRとの関わりの有無について検討し、未練の有無や、共通の友人の有無などがPDRパートナーとの関わりの有無に影響を与えていることが明らかにしている。しかし、どのような理由でPDRパートナーと関わりをもとうとしたかという主観的な判断については尋ねていない。そこで本研究では、PDRパートナーと関わる理由として動機づけを取り上げ、恋愛関係崩壊後でどのような理由でPDRパートナーと関わっているかの動機について検討する。

近年の主要な動機づけ理論の1つにDeci & Ryan (1985, 2000)が提唱する自己決定理論がある。自己決定理論は、自己決定性の概念を核として、動機づけを包括的に捉える理論的枠組みを構築しており、非動機づけ(amotivation)、外発的動機づけ(extrinsic motivation)、内発的動機づけ(intrinsic motivation)という3つの動機づけ状態を想定している。非動機づけは、行動と結果との随伴性

を認知しておらず、活動にまったく動機づけられていない状態である。外発的動機づけは、自己決定性の程度から複数のタイプに区別される。1つ目の『外的調整』は、物的報酬の獲得や罰の回避を目的とする動機づけであり、外的要因による統制によって行動が調整される。2つ目の『取り入的調整』は、部分的に内在化が生じ、明らかな外的統制がなくても行動が開始される。しかし、行動の目的は不安や恥の感情を低減し、自己価値を守ることであり、内面での被統制感から動機づけられる。3つ目の『同一化的調整』は、行動の価値を自己と同一化し、個人的な重要性から自律的に行動する動機づけである。4つ目の『統合的調整』は、ある活動に対する同一化が他の活動に対する価値や欲求と矛盾なく統合され、自己内で葛藤を生じずに活動に取り組む動機づけである。内発的動機づけは、活動それ自体を目的として、興味や楽しさなどの感情から自発的に行動する動機づけである。これらの動機づけは自己決定性の一次元上に付置され、自己決定性の低いものから、非動機づけ、外的調整、取り入的調整、同一化的調整、統合的調整、内発的動機づけと位置づけられ、これらの動機づけ概念は、学習やスポーツ、対人関係などさまざまな領域を超えた共通の枠組みとして適用されている(Vallerand & Ratelle, 2002)。岡田(2005)は、自己決定理論の枠組みを用いて友人関係への動機づけ尺度を作成している。尺度は、外的調整、取り入的調整、同一化的調整、内発的動機づけの4つの下位尺度からなる16項目の尺度である。そこで、本研究では、岡田(2005)の友人関係の動機づけ尺度を参考にPDRの動機づけについて検討する。

### 親密感

最後に、PDRは親密な関係・重要な他者となりうるのかについて親密性の指標を用いて検討する。山口・今川(2010)では、親密

性の指標としてRCIの下位指標を用いて恋愛関係、PDR、異性友人関係の比較を行ったが、PDRと異性友人関係の間に差異はみられなかった。これは、親密性を測定するRCIが、もっぱら、感情的な側面ではなく、行動的な側面の親密性を測定していることから、情緒的な繋がりが強い恋愛関係から移行したPDRとそのような繋がりが強くないと思われる異性友人関係との間に差異を見出す事ができなかったと思われる。しかし、PDRは異性友人関係とは異なる関係であると思われる。そこで、本研究では、親密性の感情的な側面について測定しているような測度を用いて、PDRと異性友人関係の親密性の比較を行う。親密性の指標としては、IOS(Inclusion of Other in the Self)尺度(Aron, Aron & Smollan, 1992)を用いる。IOSは、2つの円の重なりによって自分と想定した他者との関わりを表し7段階で親密さの程度を表す尺度であり、その特徴としては、速やかに記入でき、社会的望ましさへの反応に影響を受けず、さまざまな母集団に適用でき、親密性へのさまざまな理論的志向と一致する測度として用いることができ、行動的な親密性だけでなく、感情的な親密性にタップしていることがわかっている。

## 関係性評価

PDRパートナーとの関係をどのように評価しているのか知るために、関係を評価する項目として、谷口(2004)の関係評価6項目を用いる。評価基準は、関係満足感、要求度、関係関与度、関係持続感、重要度、依存度の6項目である。

## 現在の恋人の有無

PDRにおいては、現在、恋人がいるかどうか大きな影響を与えていると思われる。山口・今川(2010)では、PDRについてのメリットとデメリットについて自由記述で尋

ねたところ、デメリットとして、PDRと関わりをもつことによって、現在の恋人に疑われるというデメリットを感じていたことから現在の恋人がいることはそのような疑いを避けるためPDRとの関わりが抑制される可能性があると考えられる。恋愛関係は、非常に排他的な関係であり、そのような関係は当該関係以外の関わりを抑制すると考えられる。排他性とは、特定の関係にある個人がその外部の関係との関わりを抑制することに関して示す感情や行動である(相馬・浦, 2007)。排他性の性質として、排他的な感情が、「愛情」と密接に関連すること(Rubin, 1970)、排他的な振る舞いが恋愛関係の存続可能性に影響を与える可能性(増田, 1994)が報告されている。排他性の強い関係として恋人関係や夫婦関係が挙げられ、Davis(1985)は、恋愛・夫婦関係を同性や異性の親友関係と比較し、恋愛関係にのみ含まれる感情的要素として、排他性の存在を指摘している。また、遠矢(1995)は恋愛関係と異性友人関係を比較し、「独占」という対人感情が恋愛関係に顕著な要素であるとしている。排他性の肯定的側面として、排他性により関係内での愛情が高まり、関係が安定するといった点が挙げられる。一方で、排他性は、外部との関わりを抑制し外部ネットワークからの資源を得る機会を制限する可能性がある。相馬・浦(2007)は、排他性の高い恋愛関係が外部からのサポートを抑制するかどうかを恋愛関係と異性友人関係を比較し、恋愛関係にある者の方が、外部からのサポートを抑制することを明らかにしている。同様の視点から、Simpson, Gangestad & Lerma(1990)は、唯一の恋人と付き合っている人は、多くの恋人と付き合っている人や恋人のいない人たちと比べて、若い異性の魅力を低く評価することを明らかにしている。このように恋人の有無は青年に恋人がいることでもたらされる恩恵と同時に、恋人以外の他の異性関係との関わりを抑制する作用があ

りことPDRという元恋人関係においては、周囲や現在の恋人から誤解を招く可能性があるのものでその影響が顕著だと推測できる。

以上の結果から推測できるように、恋人のいるものは、恋人との関係への関係性の特徴(排他性)から外部の異性関係、この場合、PDRパートナーとの関係に対する関わりを抑制させ、PDRパートナーの価値を低く見積もる可能性があるのもので、PDRを現在恋人のいるPDRと、現在の恋人のいないPDRに分けて検討する。

本研究では、まず、PDRや異性友人関係がいかなる関係認知構造を有しているかについて検討した後で、得られた関係認知の枠組みを以てPDRを分類し、PDRのタイプによって、感情、動機づけ、コミットメントへの影響が異なるかどうかを検討する。また、現時点でどのようなPDRのタイプが見られるかは、判断できないので、特定の仮説は立てず、探索的に分析していく。

## 方法

### PDR、異性友人関係の関係認知構造の検討

他者との関係性をどう認知しているか知る事は、その関係との関係を理解するにあたって有用であると思われる。そこで、PDRや異性友人関係の関係認知構造を明らかにすることを第一の目的とする。PDRや異性友人関係の関係認知構造を明らかにするために2度の予備調査を行った。

### 予備調査1

#### 目的

関係認知構造を検討するにあたっては、Significant othersに限定した2者関係認知構造について検討した林ら(1985)の研究が参考になろう。しかし、林らの研究は、20年以上も前のものであり、こと異性との関係を取り巻く状況は当時と現在とは異なっていると

思われ、林らが研究で用いた関係性を表す言葉が、現在青年にどの程度通用するか疑問が残る。そこで、予備調査1として、林ら(1985)の用いた30の関係性を表す対項目が現在でも通用するか、また、本研究で対象とする異性関係を表す項目として適しているかどうか、そして、項目数を整理するためことが予備調査1の目的である。

調査時期：2010年11月上旬

調査協力者：大学生・専門学校生105名(男性40名、女性65名)、平均年齢19.07歳(SD=.93)。

質問紙の構成

#### 1) デモグラフィックな項目

年齢、性別

#### 2) 林ら(1985)の30項目の対単語について、家族以外の親しい異性との関係を思い浮かべて、思い浮かべた相手との関係について回答してもらった。まずは、思い浮かべた異性関係の名称を書いてもらった。

## 結果

調査協力者が思い浮かべた関係は、恋人35名、友人61名、その他9名であった。30項目について因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。スクリープロットの減退(9.02、2.63、2.01、1.56…)から3因子解釈を採用し、さらに因子負荷.45以下の項目17項目を削除し、13項目で因子構造が安定し、13項目を異性関係認知を表す語とした(表1)。

表1 予備調査1 林(1985)の関係性認知因子分析結果

	F1	F2	F3
深い-浅い	.942	.015	-.095
永続的な-一時的な	.880	-.356	.321
腹をわたつた-腹をさぐつた	.756	.152	-.142
タテマエ的な-ホンネの	-.743	-.141	-.001
よそよそしい-親密な	-.879	-.229	.070
甘えのある-きびしい	-.048	.703	.061
敵対的な-友好的な	.147	-.657	-.147
あたたかい-つめたい	.132	.606	.067
快的な-不快な	.071	.590	0.24
冷静な-情熱的な	-.090	-.550	.132
べたべたした-さらつとした	.109	.542	-.166
安定した-不安定な	.033	.196	.706
単純な-複雑な	-.057	-.030	.623
α係数	.907	.795	.586
F1		.535	.187
F2			.176
F3			

## 予備調査 2

### 目的

異性関係を表す項目を新たに収集する目的で予備調査 2 を行った。調査内容は、清水・大坊 (2005) を参考に、上手くいっている関係、上手くいっていない関係を表す言葉と恋人、元カレ・元カノ、異性の友人の中で関わりのある異性関係との関係を表す言葉を自由に記述してもらった。

調査日時：2010年11月下旬。

調査協力者：専門学校生57名 (男性38名、女性19名)

### 結果

上手くいっている関係240回答、上手くいっていない関係204回答、恋人関係72回答、元カレ・元カノ関係57回答。異性友人関係110回答であった。次に得られた回答を清水・大坊 (2005) にならい、形容詞、形容動詞、名詞以外の単語を削除し、次に、異性関係の「現在の恋人」を基準にし、重複しているものを削除し、大学教員 1 名、大学院生 6 名で、個人の特徴や印象を表すのではなく、関係を表すのに適切であると判断された単語をピックアップし、その後、その結果について討議し、35項目を選択し、さらに、林 (1985) の項目と得られた35項目で重複しているものを削除し、残った項目の対義語を検討し、最終的に残った20項目を異性関係認知を表す単語とした (表 2)。以後、本調査では、予備調査 1 と予備調査 2 で得られた計33項目を異性関係認知項目として使用した。

表 2 予備調査 2 で得られた20項目

明るい-暗い	いとおしい-憎らしい
思いやりのある-思いやりのない	刺激のある-刺激のない
隠し事がある-隠し事がない	大切な-粗末な
気づかいがある-気づかいがない	価値観が近い-価値観が違う
頼もしい-頼りない	戸惑いのある-戸惑いがない
好ましい-うとましい	面倒くさくない-面倒くさい
自然な-ぎこちない	騒がしい-静かな
信用できる-信用できない	親切的な-不親切的な
理解のある-理解のない	性的な-性的でない
良好な-険悪な	

## 本調査

調査時期：2011年 6 月上旬

調査協力者：大学生・専門学校生443名 (男性179名、女性264名) 平均年齢19.71歳 (SD = 1.22)

### 質問紙の構成

質問紙は、恋人用、PDR 用、異性友人用の 3 部構成となっており、年齢、性別、異性との交際経験の有無、現在の恋人の有無、失恋経験の有無を尋ねた後、異性との交際経験の有無によって、家族以外のもっとも親しい異性の友人、現在の恋人、もっとも最近の失恋相手のいずれかに答えるようになっていた。もっとも最近の失恋相手に関してのみ、別れてからの期間、別れの主導権、別れた後の関わりの有無について尋ね。関わりがないと回答した場合、現在恋人がいれば、現在の恋人について、現在恋人がいなければ、家族以外のもっとも親しい異性の友人について回答してもらった。

- 1) 交際期間 (知り合ってからからの期間 (異性友人)、付き合ってからからの期間 (恋人)、付き合っていた期間 (PDR))
- 2) 接触頻度 (「どのくらいの頻度で会いますか」)
- 3) 電話頻度 (「どのくらいの頻度で電話しますか」)
- 4) メール送信頻度 (「どのくらいの頻度でメールを送信しますか」)
- 5) 友人関係への動機付け尺度16項目 5 件法 (岡田, 2005)
- 6) IOS 尺度 1 項目 7 件法 (Aron ら, 1992)。「あなたと〇〇との関係を最もよく表しているものはどれですか。」という教示のあと、2つの円環の重なりによって示された尺度で、2つの円環の重なりが大きければ大きいほど、二人の関係が親密であることを示している。
- 7) 異性交際中に生じる感情尺度20項目 5 件法 (立脇, 2007)



表3 PDRの関係認知の因子分析

	F1: 肯定的 認知	F2: 性的 認知
24. 良好な—陰悪な	.924	-.115
19. 好ましい—うとましい	.836	.117
21. 自然な—ぎこちない	.798	-.133
23. 理解のある—理解のない	.784	-.022
4. 友好的な—敵対的な	.769	-.119
8. 快適な—不快な	.759	-.107
20. 満足な—不満足な	.749	-.023
27. 大切な—粗末な	.748	.132
15. 思いやりのある—思いやりのない	.748	.064
2. 腹を割った—腹をさぐった	.733	-.08
6. 親密な—よそよそしい	.719	.057
30. 面倒くさくない—面倒くさい	.701	.020
18. 頼もしい—頼りない	.697	.061
10. 安定した—不安定な	.641	-.306
1. 深い—浅い	.600	.203
25. いとおしい—憎らしい	.599	.274
3. 永続的な—一時的な	.587	-.011
28. 価値観が近い—価値観が違う	.581	.127
13. ベタベタした—さらっとした	.107	.777
33. 性的な—性的でない	-.070	.754
$\alpha$ 係数	.95	.76
F1		.03
F2		

## 8) 異性関係性認知尺度33項目

予備調査1、2で得られた異性関係性認知2対の33項目について、調査協力者と対象との関係の印象にどちらが近いかをSD尺度、7件法で評定を求めた。

- 9) 関係評価6項目5件法(満足感「○○との関係に満足している」、要求度「○○はあなたの要求を満たしてくれる」、関与度「○○との関係に深く関わっている」、持続感「○○との関係が持続してほしい」、重要度「○○との関係を重視している」、依存度「○○との関係に依存している」)  
(谷口, 2004)

- 10) 接近的コミットメント—回避的コミットメント尺度 12項目5件法 (Frank & Brandstätter, 2002)

## 結果

恋人について回答したものの87名、PDRに

ついて回答したものの119名、異性友人について回答したものの237名であった。以下、関係認知構造の検討はPDRと異性友人関係、関係認知の違いによって、コミットメント、交際中に生じる感情、動機づけが異なるのかどうかについてはPDRについてのみ検討する。

独立変数として扱う関係性認知は、関係特有の構造が見られると考えられたので、関係性認知については、PDRと異性友人関係、別々に分析をする。

## 1. 因子分析

## ① PDRの関係性認知の次元 (N=119)

以下ではPDR回答者119名を分析対象とした。異性関係性認知尺度の因子分析：因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った結果、固有値1.0以上で7つの因子が抽出されたが、固有値の減退状況や、複数の項目に同程度の負荷がかかっている項目を削除し、最終的に残った20項目2因子構造を採用した(表3)。

表4 異性友人関係の関係認知の因子分析

	F1:快適さ 認知	F2:緊密さ 認知	F3:気遣い 認知	F4:性的認 知
20.満足な-不満足な	.821	-.088	-.015	.025
30.面倒くさくない-面倒くさい	.769	-.081	.053	.042
8.快適な-不快な	.749	.070	-.010	.103
24.良好な-険悪な	.707	.073	.119	.165
27.大切な-粗末な	.698	.106	.087	-.166
21.自然な-ぎこちない	.646	.216	-.037	.198
26.刺激のある-刺激のない	.476	.042	.013	-.225
28.価値観が近い-価値観が違う	.439	.019	.122	-.196
1.深い-浅い	-.094	.884	.083	-.143
3.永続的な-一時的な	-.035	.863	.014	.003
9.タテマエ的-ホンネの	-.293	-.689	.177	.063
2.腹を割った-腹をさぐった	.169	.687	-.125	.050
6.よそよそしい-親密な	-.253	-.565	.022	.111
31.騒がしい-静かな	-.173	.488	.043	.250
15.思いやりのある-思いやりのない	.104	.053	.729	.083
32.親切な-不親切な	.188	.035	.672	.061
12.あたたかい-つめたい	-.005	.249	.652	.011
17.気づかいがある-気づかいない	.054	.347	.598	-.143
11.甘えのある-きびしい	-.126	.060	.532	-.061
7.単純な-複雑な	-.154	.051	.034	.704
13.べたべたした-さらっとした	-.108	.039	.125	-.548
33.性的な-性的でない	-.027	.023	.033	-.526
$\alpha$ 係数	.87	.87	.78	.63
F1		.74	.65	.14
F2			.45	-.11
F3				.09
F4				

第一因子は、「良好な-険悪な」、「好ましい-うとましい」、「自然な-ぎこちない」などのポジティブな関係性の認知に関する項目が多いので『肯定的認知』と名付けた（18項目、 $\alpha = .95$ ）。第二因子は、「べたべたした-さらっとした」、「性的な-性的でない」などの性的な側面を思わせる項目のため『性的認知』（2項目、 $\alpha = .76$ ）と名付けた。

## ②異性友人関係の関係性認知の次元（N=237）

以下、異性友人関係回答者237名を分析対象とした。

異性関係性認知尺度の因子分析：因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った結果、固有値1.0以上で、固有値の減退状況や複数の項目に同程度の負荷がかかっている項目を

削除し、まとまりの良さから22項目4因子構造を採用した（表4）。第一因子は、「満足な-不満足な」、「面倒くさくない-面倒くさい」などの『快適さ認知』（8項目、 $\alpha = .87$ ）、「深い-浅い」、「永続的な-一時的な」などの第二因子『緊密さ認知』（6項目、 $\alpha = .87$ ）、「思いやりのある-思いやりのない」、「親切な-不親切な」などの第三因子『気遣い認知』（5項目、 $\alpha = .78$ ）、「単純な-複雑な」、「べたべたした-さらっとした」、「性的な-性的でない」の第四因子『性的認知』（3項目、 $\alpha = .63$ ）と名付けた。以下、接近的コミットメント-回避的コミットメント尺度、交際中に生じる感情尺度、友人関係動機づけ尺度における因子分析は、PDR119名、異性友人237名を加えて分析した。

表5 接近的コミットメント-回避的コミットメント尺度の因子分析

	F1:関係継続 への意思	F2:関係継 続への疑問
10. どんなことがあっても、私は、〇〇との付き合いをやめない	.639	.051
3. 私は、〇〇をしたっている	.604	-.145
4. 私は、〇〇との付き合いが続いていなかったら、私はダメになっていた。	.571	.320
7. 私は、〇〇との付き合いが無くなったとしても、そんなに辛い	-.520	-.034
2. たとえ、私のためにならなくても、〇〇との付き合いをやめることが正しいとは感じない	.468	-.053
5. 私は、〇〇と付き合いがあることを後悔している。	-.349	.695
1. 私は、〇〇と付き合い続けるべきか迷うことがある。	.069	.660
6. 私は、〇〇と付き合い続けなければならないと感じている。	.252	.445
$\alpha$ 係数	.69	.59
F1		.230
F2		

表6 交際中に生じる感情尺度の因子分析

	F1:攻撃・拒否	F2:情熱	F3:尊敬・信頼	F4:親和不満
16. うっとおしい	.942	.017	.021	-.137
18. 困る	.796	.028	-.040	.092
17. 面倒	.795	-.085	.047	-.038
20. いらだち	.724	.117	-.036	.092
19. 嫌悪	.723	-.027	-.048	.154
3. いとおしい	.026	.959	-.072	-.047
2. かわいい	-.024	.711	.037	-.075
4. どきどき	.005	.681	-.103	.138
1. 好き	-.102	.677	.159	.073
5. 甘えたい	.115	.617	.126	.060
14. ありがたい	-.039	-.073	.853	.104
13. 信頼している	.010	.099	.783	-.160
11. 頼っている	.057	-.083	.755	.140
12. 尊敬	-.077	.047	.695	.120
15. 気楽に感じる	.036	.088	.540	-.240
6. 辛い	-.017	.050	-.124	.881
8. 不安	-.040	.084	.026	.807
7. 悲しい	-.049	.075	-.037	.805
9. 自己嫌悪	.144	-.067	.086	.600
10. 怖い	.212	-.076	.147	.502
$\alpha$ 係数	.906	.867	.849	.865
F1		-.011	-.265	.517
F2			.460	.502
F3				.016
F4				

### ③接近的コミットメント-回避的コミットメント尺度の因子分析 (N=356)

Frank&Brandstätter (2002) の接近的コミットメント-回避的コミットメント尺度を日本語表記にするため、まず、著者が、原文を日本語に訳し、それを英語を母国語とする大学教員に英語に訳してもらい、次に、その英語訳を別の英語を母国語とする大学教員に、日本語に訳してもらい、再度、著者が訳した日本語と一致しているか検討した。因子分析

(最尤法、プロマックス回転)を行った結果、8項目2因子が抽出された。第一因子は、「どんなことがあっても、私は、〇〇との付き合いをやめない」、「私は〇〇をしたっている」など、積極的に関係を継続・維持させる項目が多かったので『関係継続の意思』と名付けた(5項目、 $\alpha=.69$ )。第二因子は、「私は、〇〇と付き合いがあることを後悔している」、「私は、〇〇と付き合い続けるべきか迷うことがある」など、関係を継続・維持させることへの疑問に関する項目が多かったため『関係継続への疑問』(3項目、 $\alpha=.59$ )

表7 友人関係への動機づけ尺度の因子分析

	F1: 内発的動機づけ	F2: 外発的動機づけ
8.〇〇と一緒にいると、楽しい時間が多いから	.930	-.170
12.〇〇と一緒にいるのは楽しいから	.923	-.154
4.〇〇と話すのは、おもしろいから	.842	-.137
7.〇〇との関係は、自分にとって意味のあるものだから	.757	.008
11.〇〇といることで幸せになれるから	.756	.116
16.〇〇と親しくなるのは、うれしいことだから	.733	.116
3.〇〇と一緒に時間を過ごすのは、重要なことだから	.688	.138
15.〇〇のことをよく知るの、価値があることだから	.653	.198
6. 〇〇がいないと不安だから	.056	.797
2.〇〇がいないと、後で困るから	-.020	.796
10.〇〇がいないのは、恥ずかしいことだから	-.050	.783
5.親しくしていないと、〇〇ががっかりするから	.034	.518
14.〇〇とは親しくしておくべきだから	.183	.507
9.〇〇との関係を作っておくように、周りから言われるから	-.093	.467
1.一緒にいないと、〇〇が怒るから	-.028	.462
$\alpha$ 係数	.930	.810
F1		.230
F2		

と名付けた(表5)。

#### ④異性交際中の生じる感情尺度の因子分析 (N=356)

因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った結果、20項目4因子が抽出された。

第一因子は、「うっとおしい」、「困る」など相手に対する否定的な感情に関する項目が多かったため、『攻撃・拒否』と名付けた(5項目、 $\alpha=.90$ )。第二因子は、「かわいい」、「どきどき」などの相手に対する肯定的な感情に関する感情が多かったため『情熱』と名付けた(5項目、 $\alpha=.86$ )。第三因子は、「ありがたい」、「信頼している」などの相手を信頼するような感情が多かったため『尊敬・信頼』と名付けた(5項目、 $\alpha=.84$ )。第四因子は、「辛い」、「不安」などの相手との関係に対するネガティブな印象を受ける項目が多かったため『親和不満』と名付けた(5項目、 $\alpha=.86$ ) (表6)。

#### ⑤友人関係への動機づけ尺度の因子分析 (N=356)

因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った結果、15項目2因子が抽出された。第一因子は、「〇〇と一緒にいると、楽しい時間が多いから」、「〇〇と一緒にいるのは楽しいから」など同一的動機、内発的動機などの項目が多いため『内発的動機づけ』因子と名付けた(8項目、 $\alpha=.93$ )。第二因子は、「〇〇がいないと不安だから」、「〇〇がいないと、後で困るから」など外的動機づけ、取り入りの動機づけなどの項目が多いため『外発的動機づけ』因子と名付けた(7項目、 $\alpha=.81$ ) (表7)。

## 2. PDRの関係認知による分類

関係をどのように認知するかによって、感情、動機づけ、コミットメントが異なると思われるので、得られた関係性認知2因子の因子得点をもとにクラスター分析(Ward法)を行い調査協力者を分類した結果、解釈可能な4つのクラスターが抽出された。

得られたクラスターの特徴を明らかにするために、4つのクラスターを独立変数とし関係性認知の2因子の因子得点を従属変数とす

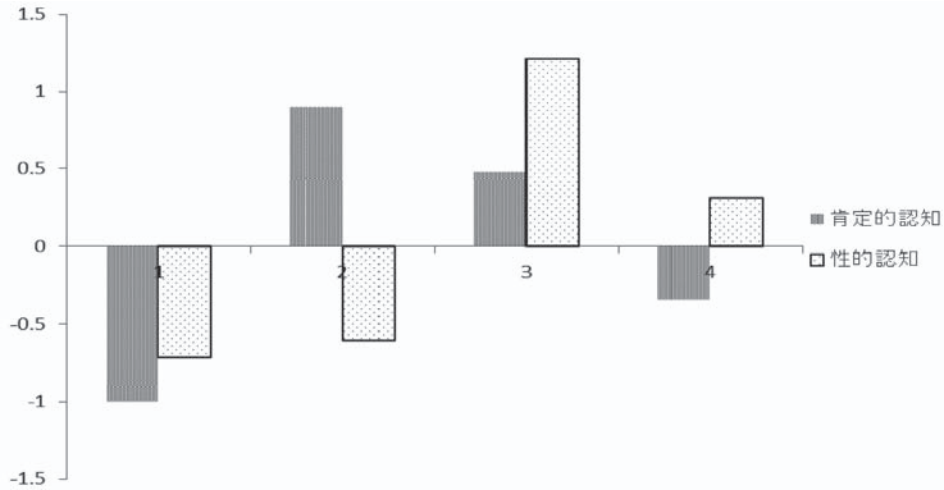


図1 PDRの関係認知タイプ

表8 各変数における関係形態とクラスターの平均値

	恋人ありPDR				恋人なしPDR			
	消極的認知群	肯定的認知群	混合認知群	性的関係認知群	消極的認知群	肯定的認知群	混合認知群	性的関係認知群
動機づけ								
内発的動機づけ	15.29(6.99)	22.20(8.62)	26.38(10.70)	24.43(7.56)	14.27(6.66)	28.06(8.48)	28.76(7.95)	16.85(5.84)
外発的動機づけ	9.29(2.84)	8.80(2.33)	12.88(5.05)	9.71(4.23)	9.40(2.53)	8.82(1.59)	13.35(5.64)	10.81(4.36)
親密感								
IOS	1.57(.75)	2.20(.67)	2.75(1.83)	1.71(.48)	1.60(.73)	2.47(1.32)	3.12(1.11)	1.92(.93)
交際中に生じる感情								
情熱	8.29(3.47)	9.93(4.84)	15.75(4.77)	11.57(4.15)	8.40(4.17)	11.47(3.10)	16.71(3.36)	11.50(4.57)
親和不満	10.71(7.21)	7.33(2.96)	11.50(5.21)	11.14(4.48)	8.80(3.80)	7.65(2.82)	13.06(5.70)	12.31(4.93)
尊敬・信頼	10.43(4.43)	15.20(5.51)	14.75(6.47)	13.29(4.68)	9.33(4.65)	17.65(4.28)	17.35(4.51)	12.23(3.78)
攻撃・拒否	11.00(5.85)	6.67(2.66)	9.25(5.49)	10.00(4.24)	14.07(6.28)	6.88(2.54)	10.94(4.13)	13.38(4.70)
コミットメント								
関係継続への意思	10.43(3.61)	12.13(3.20)	13.25(4.68)	12.57(4.96)	8.93(2.12)	14.41(3.44)	15.88(4.47)	12.38(4.08)
関係継続への疑問	5.36(1.86)	4.00(1.64)	7.25(3.19)	5.86(3.02)	6.73(3.19)	4.29(1.49)	8.00(3.04)	7.12(1.75)
関係評価								
満足度	3.57(1.15)	4.47(.91)	3.25(1.48)	3.29(1.49)	2.80(1.56)	4.41(.79)	3.29(1.16)	3.23(1.03)
要求度	1.36(.74)	3.20(1.14)	2.75(1.28)	2.14(.90)	2.47(1.24)	3.59(.87)	3.41(.87)	2.35(1.01)
関与度	1.29(.61)	2.27(1.03)	3.00(1.51)	2.00(1.00)	2.13(1.12)	2.65(.99)	3.41(.87)	2.31(.88)
持続感	2.14(1.35)	3.40(1.40)	3.50(1.41)	3.00(1.73)	2.67(1.23)	3.76(1.03)	3.76(1.14)	2.81(.93)
重要度	1.21(.42)	2.20(1.14)	3.50(1.51)	2.57(1.27)	1.60(1.05)	3.06(1.02)	3.65(1.11)	2.54(.90)
依存度	1.00(.00)	1.60(1.05)	2.25(1.58)	2.14(1.46)	1.40(.91)	1.41(.61)	2.88(1.11)	2.35(.89)

る分散分析を行った。その結果、各因子得点における主効果が有意であった。第一因子『肯定的認知』において、クラスター2群・クラスター3群>クラスター4群>クラスター1群 ( $F(3, 115) = 50.159, p < .001$ )。第二因子『性的認知』において、クラスター3群>クラスター4群>クラスター1群・クラスター2群であった ( $F(3, 115) = 99.643, p < .001$ )。各クラスターの特徴を以下に示す。

クラスター1群は、肯定的認知、性的認知をしていない群であった ( $N = 29$ : 以下、消極的認知群)、クラスター2群は、肯定的認

知をしているが、性的認知をしていない群 ( $N = 32$ : 以下、肯定的認知群)、クラスター3群は、肯定的認知も性的認知もしている群 ( $N = 25$ : 以下、混合認知群)、クラスター4群は、肯定的認知をしておらず、性的認知をしている群 ( $N = 33$ : 以下、性的認知群)であった (図1)。各尺度におけるPDRの4つのタイプの平均値を示す (表8)。

### 3. PDRにおける2(恋人の有無)×4(認知タイプ)の二要因の分散分析

各因子の合計得点を従属変数とした二要因

分散分析を行った。

### ①動機づけ

内発的動機づけ、外発的動機づけ、各因子の合計得点を従属変数とした二要因の分散分析を行った。

内発的動機づけにおいてクラスターの主効果 ( $F(3, 111) = 14.52, p < .001$ ) と恋人の有無とクラスターの交互作用が有意だった ( $F(3, 111) = 3.57, p < .016$ )。単純主効果検定の結果、恋人ありにおいて、肯定的認知群の方が、消極的認知群よりも内発的動機づけが高かった ( $p < .098$ )。混合認知群の方が、消極的認知群よりも内発的動機づけが高かった ( $p < .008$ )。性的認知群の方が、消極的認知群よりも内発的動機づけが高かった ( $p < .060$ )。恋人なしにおいて、肯定的認知群の方が、消極的認知群よりも内発的動機づけが高かった ( $p < .001$ )。混合認知群の方が、消極的認知群よりも内発的動機づけが高かった ( $p < .001$ )。肯定的認知群の方が、性的認知群よりも内発的動機づけが高かった ( $p < .001$ )。混合認知群の方が、性的認知群よりも内発的動機づけが高かった ( $p < .001$ )。肯定的認知群において、恋人なし群の方が、恋人あり群よりも内発的動機づけが高かった ( $p < .032$ )。性的認知群において、恋人あり群の方が、恋人なし群よりも内発的動機づけが高かった ( $p < .021$ )。

次に外発的動機づけにクラスターの主効果が有意だった ( $F(3, 111) = 6.24, p < .001$ )。混合認知群の方が、消極的認知群よりも外発的動機づけが高かった ( $p < .004$ )。混合認知群の方が、肯定的認知群よりも外発的動機づけが高かった ( $p < .001$ )。混合認知群の方が、性的認知群よりも外発的動機づけが高かった ( $p < .083$ )。

### ②親密感

IOSにおいて、クラスターの主効果が有意だった ( $F(3, 111) = 8.31, p < .001$ )。肯定

的認知群の方が、消極的認知群よりもIOSが高かった ( $p < .031$ )。混合認知群の方が、消極的認知群よりもIOSが高かった ( $p < .001$ )。混合認知群の方が、性的認知群よりもIOSが高かった ( $p < .003$ )。

### ③交際中に生起する感情

情熱感情において、クラスターのみ主効果が有意だった ( $F(3, 111) = 15.86, p < .001$ )。混合認知群の方が、消極的認知群よりも情熱感情が高かった ( $p < .001$ )。性的認知群の方が、消極的認知群よりも情熱感情を感じていた ( $p < .040$ )。混合認知群の方が、肯定的認知群よりも、情熱感情を感じていた ( $p < .001$ )。混合認知群の方が、性的認知群よりも情熱感情が高かった ( $p < .001$ )。

親和不満感情において、クラスターのみ主効果が有意だった ( $F(3, 111) = 5.48, p < .001$ )。混合認知群の方が、肯定的認知群よりも、親和不満感情を感じていた ( $p < .003$ )。性的認知群の方が、肯定的認知群よりも親和不満感情が高かった ( $p < .012$ )。

尊敬・信頼感情において、クラスターのみ主効果が有意だった ( $F(3, 111) = 12.36, p < .001$ )。肯定的認知群の方が、消極的認知群よりも尊敬・信頼感情が高かった ( $p < .001$ )。混合認知群の方が、消極的認知群よりも尊敬・信頼感情が高かった ( $p < .001$ )。肯定的認知群の方が、性的認知群よりも尊敬・信頼感情が高かった ( $p < .031$ )。

攻撃・拒否感情において、恋人の有無の主効果 ( $F(1, 111) = 5.25, p < .024$ ) とクラスターの主効果が有意だった ( $F(3, 111) = 9.14, p < .001$ )。恋人の有無の主効果について、恋人なし群の方が、恋人あり群よりも攻撃・拒否感情が高かった ( $p < .024$ )。クラスターの主効果について、消極的認知群の方が、肯定的認知群よりも攻撃・拒否感情が高かった ( $p < .001$ )。混合認知群の方が、肯定的認知群よりも、攻撃・拒否感情を感じ

ていた ( $p < .064$ )。性的認知群の方が、肯定的認知群よりも攻撃・拒否が高かった ( $p < .001$ )。

#### ④コミットメント

関係継続への意思において、クラスターのみ主効果が有意だった ( $F(3, 111) = 7.86, p < .001$ )。肯定的認知群の方が、消極的認知群よりも関係継続への意思が高かった ( $p < .002$ )。混合認知群の方が、消極的認知群よりも関係継続への意思が高かった ( $p < .001$ )。性的認知群の方が、消極的認知群よりも関係継続への意思が高かった ( $p < .063$ )。

関係継続への疑問において、恋人の有無の主効果が有意傾向 ( $F(1, 111) = 3.89, p < .051$ )、クラスターの主効果が有意だった ( $F(3, 111) = 10.31, p < .001$ )。恋人の有無の主効果において、恋人なし群の方が、恋人あり群よりも関係継続への疑問を感じていた ( $p < .051$ )。クラスターの主効果において、消極的認知群の方が、肯定的認知群よりも関係継続への疑問が高かった ( $p < .013$ )。混合認知群の方が、肯定的認知群よりも関係継続への疑問を感じていた ( $p < .001$ )。性的認知群の方が、肯定的認知群よりも関係継続への疑問を感じていた ( $p < .003$ )。

#### ⑤関係評価

満足感において、クラスターの主効果が有意であった ( $F(3, 111) = 7.93, p < .001$ )。肯定的認知群の方が、消極的認知群よりも満足感が高かった ( $p < .001$ )。肯定的認知群の方が、混合認知群よりも満足感が高かった ( $p < .003$ )。肯定的認知群の方が、性的認知群よりも満足感が高かった ( $p < .002$ )。

要求度において、恋人の有無の主効果 ( $F(1, 111) = 8.65, p < .004$ ) とクラスターの主効果が有意であった ( $F(3, 111) = 13.33, p < .001$ )。恋人の有無において、恋人なし群の方が、恋人あり群よりも要求度が高かつ

た ( $p < .004$ )。クラスターの主効果において、肯定的認知群の方が、消極的認知群よりも要求度が高かった ( $p < .001$ )。混合認知群の方が、消極的認知群よりも要求度が高かった ( $1 < 3, .001$ )。肯定的認知群の方が、性的認知群よりも要求度が高かった ( $p < .001$ )。混合認知群の方が、性的認知群よりも要求度が高かった ( $p < .044$ )。

関係関与度において、恋人の有無の主効果 ( $F(1, 111) = 6.25, p < .014$ ) とクラスターの主効果が有意であった ( $F(3, 111) = 10.03, p < .001$ )。恋人の有無において、恋人なし群の方が、恋人あり群よりも関係関与度が高かった ( $p < .014$ )。クラスターの主効果において、肯定的認知群の方が、消極的認知群よりも関係関与度が高かった ( $p < .022$ )。混合的認知群の方が、消極的認知群よりも関係関与度が高かった ( $p < .001$ )。混合認知群の方が、肯定的認知群よりも関係関与度を感じていた ( $p < .043$ )。混合認知群の方が、性的認知群よりも関係関与度が高かった ( $p < .003$ )。

持続感において、クラスターの主効果が有意であった ( $F(3, 111) = 6.37, p < .001$ )。肯定的認知群の方が、消極的認知群よりも持続感が高かった ( $p < .002$ )。混合認知群の方が、消極的認知群よりも持続感が高かった ( $p < .003$ )。

重要度において、クラスターの主効果が有意であった ( $F(3, 111) = 18.65, p < .001$ )。肯定的認知群の方が、消極的認知群よりも重要度が高かった ( $p < .001$ )。混合認知群の方が、消極的認知群よりも重要度が高かった ( $p < .001$ )。性的認知群の方が、消極的認知群よりも重要度が高かった ( $p < .001$ )。混合認知群の方が、肯定的認知群よりも重要度を感じていた ( $2 < 3, .008$ )。混合認知群の方が、性的認知群よりも重要度が高かった ( $3 > 4, .009$ )。

依存度において、クラスターの主効果が有

意であった ( $F(3, 111) = 10.85, p < .001$ )。混合認知群の方が、消極的認知群より依存度が高かった ( $p < .001$ )。性的認知群の方が、消極的認知群よりも依存度が高かった ( $p < .001$ )。混合認知群の方が、肯定的認知群よりも依存度が高かった ( $p < .001$ )。性的認知群の方が、肯定的認知群よりも依存度が高かった ( $p < .040$ )

## 考察

### 1. PDR の関係認知次元と PDR タイプ

PDR をどのような関係であるかを関係認知の次元から検討した結果、PDR を『肯定的認知』や『性的認知』という認知の枠組みから捉えていることが分かった。異性友人関係の関係認知の次元として、『快適さ認知』、『緊密さ認知』、『気遣い認知』、『性的認知』の4つの次元がみられた。これらの項目内容からみると異性友人関係の『快適さ認知』と『緊密さ認知』というものが、PDR における『肯定的認知』に対応していると思われる。PDR が異性友人関係のように、認知次元が分化されていないのは、スクリプトの欠如が影響している可能性がある。スクリプトが欠如していることで、当事者はPDR パートナーをどのように捉えていいかの指標が得られず、その結果、多くの項目を含んだ『肯定的認知』という抽象的な因子が得られたのではないか。また、『性的認知』は、PDR パートナーを異性であると認識していることが伺える。異性友人関係との認知構造の差異として、『気遣い認知』という側面が、PDR では見られなかった。PDR というかつて恋愛関係にあった関係は、関係は崩壊してしまったが、相手のことを熟知しており、互いに気遣いなどが意識しない間柄である可能性がある。この点に関しては、異性友人関係との比較を通じて明らかにする必要がある。

関係認知の枠組みを用いた PDR のタイプ

の検討においては、4つの解釈可能なPDRタイプが明らかになった。第一のタイプは、肯定的認知、性的認知をしていない群（消極的認知群）、第二のタイプは、肯定的認知をしているが、性的認知をしていない群（肯定的認知群）、第三のタイプは、肯定的認知も性的認知もしている群（混合認知群）、第四のタイプは、肯定的認知をしておらず、性的認知をしている群（性的認知群）であった。

### 2. PDR タイプの影響

これらのPDRタイプと、現在の恋人の有無によって、関係への動機づけ、交際中に生じる感情、コミットメント、関係評価、親密感が異なるかどうか検討した結果、内発的動機づけ、外発的動機づけ、IOS、情熱感情、親和不満感情、尊敬・信頼感情、攻撃・拒否感情、関係継続への意思、関係継続への疑問、関係満足感、要求度、関係関与度、持続感、重要度、依存度においてタイプの主効果が見られた。

これらの差について、肯定的認知群と混合認知群が高い得点を挙げていた。一方で、性的認知群は、消極的認知群と比べ、情熱感情や関係継続への意思、重要度、依存度で、得点が高く。これらの感情や評価は、肯定的認知だけではなく、性的認知しているだけでも高まることが伺える。

さらに、親和不満感情、攻撃・拒否感情、関係継続への疑問、依存では、性的認知群の方が、肯定的認知群よりも、多く見られた。これは性的認知群が肯定的認知群よりも、関係に不満や、疑問を感じていると言える。もう恋人関係ではないPDRパートナーとの関わりに性的な要素を見出すことによって異性としての想いが喚起され、関係に対して葛藤が生じ、ネガティブ感情や関係継続への疑問が生じるのではないかと推測できる。

次に、攻撃・拒否感情、関係継続への疑問、要求度、関係関与において、現在の恋人の有



無の主効果が見られた。

これらの差については、すべて、現在、恋人がいない者の方が、現在、恋人がいる者よりも高かった。現在、恋人がいる者は、PDR パートナーとのことを過去の出来事として考え、相手にネガティブな感情を抱くことなく、現在の恋人との関係に目を向けるが、現在、恋人がいないものは、別れたことによるネガティブな感情を PDR パートナーに向けやすく、相手との関係に囚われてしまっている可能性がある。また、恋人がいないことで、PDR パートナーとの関わりに焦点を当てがちになり、別れたのに関わりがある現状に対して疑問をもつかもされないし、同様に、恋人に求めるものを PDR パートナーに求めてしまうのではないか。

また、内発的動機づけにのみ、PDR のタイプと現在の恋人の有無の間に交互作用がみられた。恋人の有無に関わらず、肯定的認知群・混合認知群が、消極的認知群よりも、内発的動機づけが高かった。これは、関係に関わろうとする際、相手のポジティブな資質を認知する事によって内発的動機づけがなされ、相手にそのような資質を見出さなければ、内発的動機は喚起されないといえる。また、現在、恋人がいるものは、性的認知群の方が、消極的認知群よりも内発的動機づけが高く、PDR パートナーに、肯定的認知か性的認知いずれか一つでも認知すると積極的に関係に関わろうとするようだ。一方、現在、恋人がいないものは、性的認知のみだけでなく、肯定的認知も認知する方が、内発的動機づけが高かった。

現在、恋人がいないものは、PDR に異性としての性的な側面だけではなく、相手を肯定的認知をする事で、積極的に関わろうとするのではないか。これは、現在、恋人がいない者は、PDR パートナーを、異性と言う側面だけではなく、恋愛関係は崩壊したが、好ましい人物であると認知しているためではな

いかと思われる。もしかすると、未だに PDR パートナーに未練のようなものを感じているかもしれない。また、肯定的認知群において、現在恋人がいない者の方が、現在恋人がいる者よりも内発的動機づけが高かった。これは、現在恋人がいる者は、恋人という自分にとって好ましいと思える人物と関わりがあり、さまざまな恩恵（ソーシャル・サポートなど）を得られるが、恋人がいない者は、好ましい特徴を持っていると認知された PDR パートナーに接することで、恩恵を受けようとしているのではないか、もしくは、PDR パートナーを肯定的に認知するということが、復縁を目指しており、そのために内発的動機づけが高められるのではないかとも考えられる。それとは、逆に、性的認知群においては、現在、恋人がいる者の方が、現在恋人がいない者よりも内発的に動機づけられていた。恋人がいることで、性的認知が促進され、以前の恋人としての性的な側面が喚起されるのではないか。ここから、PDR パートナーに積極的に関わる動機として、現在恋人がいないから性的パートナーの代替関係として PDR パートナーと関わっているという説明では不十分であり、相手に好ましい特徴を有していることで、積極的に相手と関わりたいと思うと考えられる。

本研究は、PDR のタイプを明らかにするために、関係をどのように捉えているか、関係性認知の視点から PDR を分類し、PDR パートナーとのコミットメント、感情、動機づけについて違いがあるかどうか探索的に検討した。その結果、PDR を関係認知という次元でいくつかのタイプ化かできることがわかり、さらに、そのタイプによって、関わる動機や、関わりに対する志向、生起する感情が異なることがわかった。今後は、PDR という関係を捉える際に、タイプ化と視点は重要であると思われる。また、PDR と異性友人関係とでは、関係認知の次元が異なる可能性が示さ

れた。これは、PDRと異性友人関係が異なる関係であるとした山口(2011)に一致した結果となった。やはり、PDRと異性友人関係は異なる特徴をもった関係であると考えられるのではないか。しかし、PDRと異性友人関係との直接的な比較を行っておらず、今度は、2つの関係間での共通変数を用いた比較が必要であろう。

### 3. 今回の問題点と今後の課題

最後に、タイプ化についての問題点として、本研究でのSD法の手法を用いた関係性認知の分類は、あくまで、研究者側が用意した認知の枠組みでしかなく、個々人の独自性を捉えきれたかどうかには疑問が残る。PDRという対象がすでに研究し尽くされある程度の知見が蓄積しているならば、このような研究方法も有効であろうが、現段階では、PDRの知見が蓄積されているとは言い難い。今度は、研究者の枠組みにとらわれず、PDRパートナーと関わりがある者との面接などを取り入れることで、今回の認知の枠組みの捉われないPDRの姿が描かれ、PDRの理解に役立つのではないかと思われる。

## 引用文献

- Aron, Aron, & Smollan 1992 Inclusion of Other in the Self Scale and the Structure of Interpersonal Closeness. *Journal of Personality and Social Psychology* 63 p596-612
- Davis, K. E. 1985 Near and dear friendship and love compared. *Psychological Today* 19 p22-30
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. 1985 Intrinsic motivation and self-determination. New York: Plenum.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. 2000 The "what" and "why" of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry* 11 p227-268
- Deutch, M 1982 Interdependence and Psychological Orientation. In Derlega, V. J. & Grzelak, G. (Ed) Cooperation and Helping Behavior. Academic Press
- Frank, E., & Brandstatter, V. 2002 Approach Versus Avoidance: Different Type of Commitment in Intimate Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology* 82 p208-221
- 林文俊・今川民雄・津村俊充・大坊郁夫 1984 対人的オリエンテーションの研究(2) 二者関係認知の構造について 日本心理学会第48回大会発表論文集 p662
- 林文俊・今川民雄・津村俊充・大坊郁夫 1985 対人的オリエンテーションの研究(5) Significant othersに対する関係認知の構造について 日本心理学会第49回大会発表論文集 p269
- 増田匡裕 1994 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, 34, p164-182
- 増田匡裕 2001 以前の恋人との友人関係(PDR)と新しい恋愛関係の交渉と葛藤についての探索的研究—対人関係の正当性に関するフォーク・サイコロジー— 日本社会心理学会第42回大会発表論文集 p250-251
- 宮木由貴子 2007 現在の青年層の「恋人」と「異性友人」 Life Design REPORT 第一生命経済研究所 p24-31
- 中村雅彦 2003 対人魅力の形成 西日本法規出版
- 岡田涼 2005 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討—自己決定理論の枠組みから パーソナリティ研究 14 p101-112
- Rubin 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology* 16 p265-273
- Rusbult, C. E. 1983 A Longitudinal test of the investment model: The development of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. *Journal of Personality and Social Psychology* 45 p101-117
- Simpson, J. A., Gangestad, S. W., & Lerma, M. 1990 Perception of physical attractiveness: Mechanisms involved in the maintenance of romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology* 59 p1192-1201

- 清水裕士・大坊郁夫 2005 恋愛関係における関係性認知が精神的健康に及ぼす影響 対人社会心理学研究 5 p59-65
- 相馬敏彦・浦光博 2007 恋愛関係は関係外部からのソーシャル・サポート取得を抑制するか—サポート取得の排他性に及ぼす関係性の違いと一般的信頼感の影響— 実験社会心理学研究 46 (1) p13-25
- 谷口淳一 2004 RCIの改訂と妥当性についての検討—RCIで測定される関係の親密さとは?— 対人社会心理学研究, 4, p55-66
- 立脇洋介 2007 異性交際中の感情と相手との関係性 心理学研究 78 p244-251
- 遠矢幸子 1995 異性間の友人関係の特性 (1) 日本社会心理学会第36回大会発表論文集 p100-101
- Vallerand, R. J., & Ratelle, C. F. 2002 Intrinsic and extrinsic motivation : A hierarchical model. In E. L. Deci, & R. M. Ryan (Eds.), Handbook of self-determination research. Rochester, NY : University of Rochester. p37-63
- 渡邊舞 2009 新旧友人への友人関係期待が友人関係に及ぼす影響 北星学園大学大学院論文集 12 p123-140
- 和田実 1993 同性友人関係: その性および性別役割タイプによる差異 社会心理学研究 8 p67-75
- 山口司・今川民雄 2008 恋愛関係崩壊後の関係形成に影響を及ぼす要因について (2) 日本社会心理学会第49回大会論文集 p582-583
- 山口司・今川民雄 2010 PDRにおける行動特性としての親密性の検討—恋人関係と異性友人関係との比較を通じて— 対人社会心理学研究 10 p163-168
- 山口司 2011 恋愛関係崩壊後の関係における交際内容に関する研究—Post-dating relationshipと恋愛関係、異性友人関係との比較— 北星学園大学大学院論集 14 p47-60